

(図画工作科)

自分の思いや考えをすすんで表現しようとする子どもの育成を目指して  
～感性を働かせながら、自らつくり出す喜びを味わえる題材・支援の工夫～

大阪市立泉尾東小学校 渡邊諭 北原惇史 田中久恵 松田邦宏

## 1. 研究主題設定の理由

本校では「自他ともに生きる子」「たくましい子」「よく考える子」を育てることを教育目標に研究実践を進めてきた。

本校の児童の特徴として、何事にも興味・関心を持って取り組み、与えられた課題や目標に一生懸命に取り組むことができる、いい面がある。しかしその一方で、相手の思いをくみ取れなかったり、自分の思いや考えをうまく相手に表現できなかったりして、本来の自分の思いや考えを、自信を持って表現することが消極的な面も見られた。そこで、「自己実現に向かう過程」を大切にできる教科である「図画工作科」を通し、子どもたち自身が、自分の思いや考えを持ち、自分らしい表現を探り、達成感・成就感を味わえるような授業実践・研鑽に努めることを目標とし、平成25年度より図画工作科を研究教科と決め進めてきた。

## 2. 研究の趣旨

図画工作は、子どもたち自身が自分の思いや考えを持ち、自分らしい表現を探り、表現していく活動である。そこで、図画工作の活動を通して、自分の思いや考えを豊かに表現するための知識や技能の育成を図っていく。また、友だちと互いの違いやよさに気づき、認め合うことで、また新たに表現しようとする豊かな感性の育成も図っていく。

図画工作で展開される「つくり・つくりかえ・つくり続ける」表現活動の過程は、自らつくり出す喜びを味わい、自分の良さや可能性を見つけることができると考えた。「こうやってみよう」「おもしろい」「はじめてした」という感動や新たな発見が、自分の思いを表現したいという意欲の源となり、先の知識や技能・感性の育成をより確かなものにしていくと考えた。

また、そうして表現したものを鑑賞し自分や友だちのよさを認めあう活動は、児童の自尊心を育み、主体的に自分の考えを表現し、追及していこうとする力として育成されるものである。そのような子どもの姿を、「自らすすんで自分のことを表現しようとしていく子ども」ととらえることにした。そして、そのような子どもの姿に近づけるために研究の視点を定め、授業・授業検討会を通して実践を重ねた。

## 3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

### 視点① 多様な表現を生み出す題材や支援の工夫

- 題材の開発（様々な材料・用具を扱う）
- 技能を習得し、新たな表現を生むための学習指導材の工夫
- 児童が見通しをもち、意欲を高める導入やワークシートの工夫

### 視点② 表現と関連した鑑賞活動の工夫

- 意欲を高め、構想を練る制作前の鑑賞活動の工夫
- 友だちとの情報交換など、次の表現につなげる制作時の鑑賞活動の工夫
- 互いの作品の違いやよさを認め合う鑑賞活動の工夫

### 視点③ 経験や技能を活かした活動のあり方

- 用具や材料の扱いを “どの学年で” “どのように習得していくのか” 集約し、まとめる。
- 今までの経験や技能を意識した学習の進め方
- 用途に合わせた用具の正しい扱い方

## 4. 研究の成果と課題

### (1) 研究の成果

- 各学年の扱う材料や用具を見直し集約したことで、児童が 6 年間に身に付ける用具の扱いや技能を、指導者が見通しをもって知ることができた。系統立てながら、題材の開発や授業実践を行うことができ、多様な材料・用具で児童が表現活動を行うことができた。
- 学習の導入段階を大切にすることで、児童の興味関心を引き付け、やってみたいという児童の意欲を高めることができた。材料に触れて十分に遊ばせたり、指導者が表現した作品の提示、映像や写真を見せたりと、児童の実態や題材に合わせて工夫を凝らすことで、児童の意欲が高まり見通しをもちながら、夢中になって活動する姿が見られた。
- 発想を広げたり、自分のイメージに近づけて表現したりしていけるよう、様々な表現技法を学習指導材で提示した。児童が活動に見通しをもって取り組むことにつながり、児童の意欲付けになった。また、自分なりに表現技法を生み出す児童も多く見られ、児童の表現活動の幅が大きく広がった。
- イメージマップや物語をつくって構想を練るなど、ワークシートの工夫により、どの児童も見通しをもって意欲的に創作活動を進めることができた。また、活動の順番を視覚化・順序化して具体的に提示し、スモールステップをふむことで、思いを広げ、より明確なイメージをもって表現活動を進めることができた。
- 制作途中や制作後の鑑賞方法を工夫したことにより、自他の表し方の工夫やよさを見つけることができ、制作への意欲につながったり、達成感や成就感を高めたりすることにつながった。自分の作品に自信をもつことができた。

### (2) 今後の課題

- 色々な材料や用具を使い、各々が工夫して制作を行った実践では評価が難しかった。指導者が各自の表現を評価する視点を具体的に明らかにし、個に応じた指導・支援の仕方を工夫しなければならない。
- 指導者の見本から脱却した自由な発想を引き出すための支援が引き続き大切である。
- A 表現（2）の造形活動は様々な研究を行ってきたが、A 表現（1）の造形遊びについてはまだまだ研究実践を行う必要がある。